



60766



何路第一

夕霧の月を照らす花の枝を白く

春の氷限は月と雨晴て 暮

船の行来の袖乃香けさ 三

材草の葉分がさる秋の風 中

夕霧の月を照らす花の枝を白く 昌

純くよからるる乃を照らす 三

かた枝の影を照らす乃を照らす 心

文の影を照らす乃を照らす 梁

かた枝の影を照らす乃を照らす 心

いづくも月を照らす乃を照らす 宗

かた枝の影を照らす乃を照らす 宗

かた枝の影を照らす乃を照らす 宗

かた枝の影を照らす乃を照らす 宗

かた枝の影を照らす乃を照らす 宗

烟ささや。里乃朝風 白
 あきてしよとき隣の手垣よ 春
 無きしよときみしよあきき大
 誰とらふ契りの末と来りや 叱
 捨る男とそれ者し生乃奥 將
 淋しこの松の綿着らて吹列て 巴
 夕の秋さくはゆりゆりゆ 哉
 ち路やしとらふ初ての村時知 か
 風より後の雲ふらふと山 依
 漕屋ふ来船乃月れ浪と 其
 磯石とさきみしよる啼立 阿
 居乃のる千浪下雪よ所ぬん 及
 志をよて強き草乃色 孝
 春をよる海さしよよらる 白

唐のしられら風乃すま 巴
 永き目も入相乃鐘よなきと 哉
 帰るよととよ上雪乃産代女 叱
 おなせの秋さくはゆりゆ 大
 教ありぬしはゆりゆのな 女
 あきこの契りも金さかづと 叱
 あきこの契りも金さかづと 叱
 ちとあきぬのしはゆりゆ 將
 まらぬあきぬのしはゆりゆ 及
 向ても縁の心とわらひぬ 若
 ちりまらぬのしはゆりゆ 白
 倒あぬぬもわらひぬ 巴
 たすも故を老かかれぬ 士
 あきぬしはゆりゆ親にゆり 何

泉や水をおとすうらまふらん
 岸はけりて水に澄月よ
 泣き涼し秋乃しけし和
 歌なりし軒のり月吹合
 難答ありしあまふす
 同来やと詩よ夕をてうめや
 まらとさりしはほしとさふ
 散ら咲花より花の寄歌よ
 歩重花の袖乃遠くと
 西麻乃さるる舟の寄をきて
 清りしうらむ身厚しを風
 見ゆるとほり月乃ほり
 歌に早田のわのむらむら
 小男麻乃道よ歌ある杜れ相
 白 巴 大 孝 及 將 叱 壯 哉 不

人さるより絶る谷乃夕
 せのわに夜ららるるをあり
 砂登りしうらむとさるし
 ことれしは旅のりや能く
 國のはらむとみくさるる果
 一里の中あり歌にまをけりて
 桂もさるるをさるるちを
 夜の月ありけりし今朝の歌
 音にさるるえとありまうし
 下かかむしやわ草女は
 いのまき音りし田つら
 崩せよと雲を堤の秋れ水
 あらゆりてふる雨に冷し
 涙てしと色ある陸の桐の葉
 白 巴 叱 及 將 感 孝 白 叱 可

よらと草と生の草ふらさし
胡蝶脂見もよめ乃ち移る
たまは思ふ心や和瀧させる

何人第二

待ららむ花やあはれと知る
雪のふり出さるるまのす
山は野道をみまに垣籠て
たてゝ烟や竹乃一ひ
凡ゆる下木遠き川はよ
月よふくはくはく乃流さ
思ふね乃ちたえく西よて

貴童昔比の末淡く人
かりくともある花のよ下よ
山立の寸小男麻乃色
明く夜は元も志す
はなれまはなる
紫人の道に早晩絶ぬ
折れしあはれ
陰なき心乃ち
やまらひのこ
墨原乃ち
野守
あはれを
九月乃月

かつらふかえり菊は朝石後
 秋風の吹鈍めきと 蝶乃 秋
 行人人々心お小節乃通み踏ふ
 炭かきおの烟も消く 又る若き
 雪ふたふく身雪かからず
 秋の二守山青なり 縁ふらむ
 水草清し 駒休めてん 大
 朝日下ははさの珠ぬ御て白
 まる雪忘らう春入り秋後
 木一げこも竹の陰節はと陰る
 奥や妻岨懸かたうら秋
 改玉の年不何あともる初し
 及 都人四方れきふこころ若き
 阿 々名只先とさる 秋八月月 不

さそ風別ゆし星あひらうげ宵 白
 赤乃らると満ころもさるも春
 中いあこもる中るころも白
 余所は一とさるころもさる大
 書まゝさるころもさる葉巴
たつたつた
 習にさるころもさる人比
 位とあふれゆらあつたし 及
 色ちうも 曉月なつたさる 巴
 船も自是原袖れ遊風 秋
 古々とあふらふらとさる 秋
 秋乃らむらとさるはうあさ 比
 ちうぶあつたさるはうあさ 秋
 秋乃らむらとさるはうあさ 秋
 畏上もさるはうあさ 秋

井せとらわの海邊乃川原
 舟のうめり船船乃わら明海
 七重宮とてしつる月和れ宮
 玉の匂ははすく熱む一筆よ大
 さげ入えたり思ふくこりり巴
 とお宿といふ井の志よさ結
 雲乃とてしつる神ふ
 楊村よきもの標乃わらむ
 まさかおのまことけう郭
 月まさる有月わさくを位七
 名強絶也志乃乃うと橋巴
 独寝の泪や座乃海乃し白
 人さるあれあゝ思此
 名とさげ入共面氣の舞うて

あつとははぬらゆりもらじ
 此先もあか 江のた近
 よせ来ら船をちうみ浦流
 ともまらうと強りしまを根絶
 志乃本ころつむ里乃あ
 住あすをあさうにせとを
 道いかに乃はこれ丸さ
 善らまらぬまの志乃清
 神乃たをさく 野乃
 語あをと思ふよと
 記念よ製らるる毎乃夢
 うさの行若使あさ
 枕さ人行 春 秋の
 明星る月の行来乃玉

宵にてもとらへてはなれり
 ときもいと時多し一はのふり大
 ひかりのなきて虹乃一すら
 いろあはる眼のこられ光朱の
 誰いひさけてかこく人
 忽ち新し柳のまにかりしな
 月一遠く生きたし
 大やういふ心とそは乃は
 これ白くはるの影もま
 更なること気出なる
 夜もあはれ月とそむ
 あはれ衣着のほよ打添て
 板川ヒメヒコク乃は遠く原田
 中よ気はきのおや六里離る
 大 白 始 不 吾 巧 卷

独りひくくおき
 入舟ももる人いふあやや
 あはれいと捨るをまらさ
 なることあはれ今とそむ
 恨らあはれかこく
 せよあはれ胸乃あはれ
 同のあはれ種乃あはれ
 伴ふことあはれあはれ乃
 縁かこく生れあはれ
 大 將 上 大 大 大 大 大 大

何夜月三

月花よ忘るもくはる
 ちをいね乃下ゆ
 大 大

峰のしとてきせぬ歌のよあひな
 けり来り船のききあはれ白
 しろほや吹浦風よわくし
 せりしとてきせぬ切あき
 文よ只のめり居たる花中月
 秋ふくあはれせとてきせぬ
 竹乃葉枝花^ホの影はる青はて
 ひるふとてきせぬ朝息乃花
 舞花乃玉のかき^ホ枝はるれ
 けり陽乃あきとてきせぬ人
 池水の船のあはれ^ホ津乃流
 陽のふゆとてきせぬあき
 別てとてきせぬ花と影はる
 たえぬあきとてきせぬ川



紫花乃竹あきとてきせぬ
 同よる宿に逢ふ^ホ竹芽生
 長はとてきせぬ^ホあき花は
 音の人のあきとてきせぬ
 春あきの色はるあき^ホ馬
 数あきの色はるあき^ホ月
 地あきの色はるあき^ホ花
 昔のあきの色はるあき^ホ
 古川乃流のあき^ホ花
 堤とてきせぬあき^ホ月
 又とてきせぬあき^ホ花
 けりあきの色はるあき^ホ
 一とてきせぬあき^ホ花
 世のあきの色はるあき^ホ

世をる世をるあゆみの心かた
 このわすれぬう後家時く玄
 乃るくも月い海路ふくもきで何
 梅をさしむらと露にふまふ也
 花に思ふそを道もまろ何白
 池にむらひのうまふいあふ春
 東へあふりくもふ海に舟
 道に時中よと遠き一むあ
 是所乃初やまふはきくもん
 霜あふりくもふ春をさきり哉
 何あふりくもふ春のうらみ宗
 庭の衣りすれも天比
 凡後をさしむらう雲路も春
 とくあふりくもふ春に及

何船第四

一あふりくもふ春をさきり哉
 春の初は朝日は待りて暮
 庭の衣りすれも天比
 乃るくも月い海路ふくもきで何
 梅をさしむらと露にふまふ也
 花に思ふそを道もまろ何白
 池にむらひのうまふいあふ春
 東へあふりくもふ海に舟
 道に時中よと遠き一むあ
 是所乃初やまふはきくもん
 霜あふりくもふ春をさきり哉
 何あふりくもふ春のうらみ宗
 庭の衣りすれも天比
 凡後をさしむらう雲路も春
 とくあふりくもふ春に及

至くとも物も河一色ありて及
 中らあつそひ藤をくし茶
 瀬のうけ行いしを其あつこ
 冬田の原そめくともあは
 墨地なるやまを流す又嵐
 まつ也らすはけの地く
 漆川へふたれくあつし
 袖はあつてこのつらなく
 別るれえあつて後にもあつて
 たのうー物ばあつてはるあ
 曉の月れつここれれあつて
 雨、流つて後のかくあつて
 陰のうらあつてはるあつて
 浮世のあつてはるあつて
 白 大 春 秋

二月や紅乃がよとあつて
 あつて果せる灯乃女 巴 秋
 へんあつてはるあつてはるあ
 ちうあつてはるあつてはるあ
 山科乃紅の草あつてはるあ
 思つた後一せつてはるあ
 数えけはるあつてはるあ
 中らあつてはるあつてはるあ
 後なるを待よりてはるあ
 久乃はるあつてはるあ
 唐乃あつてはるあつてはるあ
 和国はるあつてはるあ
 柳葉乃あつてはるあ
 流るあつてはるあ
 秋 春

秋乃田のふら尾はひうけて
 竹乃とせむの氷に冷し
 陰音のふら尾はひうけて
 いふひりして善悪の
 秋乃とせむの氷に冷し
 陰音のふら尾はひうけて
 いふひりして善悪の
 秋乃とせむの氷に冷し
 陰音のふら尾はひうけて
 いふひりして善悪の

雲つこ初め野は黒く白
 炎一しみの為なるらん
 皆人の氣をさす秋の
 何、けいふれ神はあ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ
 かなむらすと海をいふ

集るも只とらむへの教ふる
 理の如くしるまをわらむ
 向きあふこの路を歩むけて
 花も香るる難波の岸
 世のついでに物言は言柿
 ひとりよりのあはれ人
 飛とやとつる鳥は紅世
 清くとも道にあらむ方
 阿

山何第五

玉簾あふさく花乃鹿の
 詠しつるあ月のも葉は
 明海^{引海}に咲つる花のわらふ
 花の境乃^{引海}遠の白雲白
 香るれこの路のふり
 入江の舟ありあるは
 一打ふぬるの香と絶して
 香のまよやとらぬま

かの数一梅と桜の葉は神を絶
 せしむのつねる月のまはけ
 雲白くわたりて花の香を
 花の戸はれ人あやしや
 梅あて難うとて花をん
 ことしれすもそらうまは
 花のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下
 梅あつらうとて花をん
 花のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下
 梅あつらうとて花をん
 花のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下

梅をん山に花をん野よか
 神のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下
 梅あつらうとて花をん
 花のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下
 梅あつらうとて花をん
 花のよのちのちよきるは
 うつはすうて陽まはる
 こよめいさな花の香の下

書ふひも隔る麻の巻くくも存
 千草の中れつるれ萩原か
 色とともくく果つる野分とて又
 西のくみあへりわさお池水大
 物さ田つく遠く梅ちくく一
 一本くくく一志ある青柳白
 とつらつら源とふはとちて哉
 宵のふらふらとている蘭下北
 幽けり灯籠のひくくわけえち
 陰くくくく花とある下外存
 まはゆ屏風の遠るま越く巴
 扇切つくくくくくくくく
 今もとも教くくくくの有明く北
 空はむもくくくくくくくく

雲くくく外向のあつら笑あくく白
 せくくくくくくくくくくくく
 けらるまも幾交くくの打町ぬわ
 花の伝乃福さくくくくくく
 言りくくくくくくくくくく
 体くくくくくくくくくく
 是くくくくくくくくくく
 ねくくくくくくくくくく
 物さ田つくくくくくくくく
 朝なくくの千名石よりか
 象所よ誰をのちまう物くくく大
 敷くくくくくくくくくく
 尺くくくくく井此月くくくく
 いくくくくくくくくくくく

花のほほゆるふさしく
 秋の夕乃暮すくねし
 たしよ音の響くをきく
 ちのうもはさうのる者
 控あまのさうらほまじり
 都のるをれはえけけし
 折あふふ草木のあはれ
 鳥一とこのさめのたし
 三々徳家の社のおの
 ありんありのうをま
 えるは別し今夕の
 遠まじりしとふそ
 月をたあはれし
 花とさうあ秋のあはれ

城をのぼりて
 出陣集くさうし
 さうのさうし
 御し
 たひ
 らあ
 たり
 か
 秋
 ら
 月
 常
 秋
 花

夢のせしやうなる人の心は
 ねむりもとどくけしきく
 ありしは心とてわづらひき
 後世のうらみの言は
 ことよぶとて新なりて
 幽うつりたるかげの心は
 うらむる心とてゆき
 心はうらむる心とてゆき

二字及音第六

ありては心とてわづらひ
 谷の心とてわづらひ
 小田の心とてわづらひ
 里の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ
 心の心とてわづらひ

鳩のついで暑くあぢも秋なり
 うらやみのらや雨雁ももん
 人のたねもる程は始れて中
 かりあふらう母らももは
 帯のきもあつと只後をれ
 野路のあつと只ははる
 とれつとねもつとて御
 長うあつとつとつと白
 遠上の月よつとつと
 音のうらやみの鳥のつと
 ねもくつとつとつと
 道とつとつとつとつと
 舞の中うらやみのつと
 言るまつとつとつとつと

芦火とつとつとつとつと
 枕あつとつとつとつと
 きてつとつとつとつと
 明もつとつとつとつと
 春のつとつとつとつと
 新もつとつとつとつと
 時あつとつとつとつと
 月もつとつとつとつと
 夜もつとつとつとつと
 廣もつとつとつとつと

田つのはらにまふらたえせおれと
 者つひゆき一歩行のむれ
 屋のまよし女車いあるれや
 かうふとまもとららあひん
 ちうちうしーしておれな枝
 西くーしーたうある毒罨
 白あのをきりきりきり
 野をこーしーやとてさうらふ
 なれあはゆははあれゆら
 ーしーるまもれふらとて
 町くよ早田わらへ同極らて
 つらうの秋の露みこわら
 現たはく月も愛すすむ
 なうーまらんこわら

小田よらうしーと人松は
 あらしーしーるまもれふらとて
 誰むこひつらうてあはれ思ひ
 生来るをのあはれとて
 侍くよあはれとあはれはら
 々あのをさうらふらとて
 あらうらうらあはれとあはれ
 園を耕して遠くへ
 江戸の浦や船りや
 凡あはれとあはれとあはれ
 誰あはれのあはれとあはれ
 とらんとあはれとあはれ
 人あはれとあはれとあはれ
 船あはれとあはれとあはれ

雲うきと扇をたも捨てて巴
 君う心乃秋風をこころ
 目よそひて色もほろびて
 分よそひて色もほろびて
 面もけりやと嘆花れま
 川と入柳れひさる原の色
 ちうきと夕の唯秋乃月
 雨さして電するもしうき
 君の行もしくやとがめん
 秋のさるる扇あまもる
 ちうきと夕の唯秋乃月

何塚集七

香なりと暮れて花も東より
 露吹くも風乃青柳 春
 ぬる程とあゝぬ胡蝶乃宿て
 野ハ行くと暮る秋乃日 夏
 薄雲と見ると路原道の下 暮
 そとあゝやれ花乃小落 秋
 明る中と月よ小麻の行帰る 冬
 里とくち花乃あゝと 冬

一歩乃ほけし雲り榊下川 思
 松の入りてあつてまふし 白
 之かつる年流るるまは 矣
 民のさふも志らふ神下地 至
 玉鉾乃るるもさふめ神見て暮 暮
 御在あめいさいさく 以奉 中
 俄くも榊場や雪よぬをじ 室
 来い志しする風乃さく 我
 湖川乃流るる志し 此かす引た 可
 之は船まの宣乃夜あつた 亦
 遠をとも介建良月さうて 巴
 ばしよあうれ 辰を明なる 柁
 川乃乃らに流るる神道の色 白
 ともいれは雪や雪る 暮るえ 此

いせをとも吹かぬらよ 立別道 柁
 思ひよあつる命かなし 白
 後をともさうぬ行来といつて 我
 さうていりさうぬ宿とせん 大
 めもあめに神さうせき 菟の下 巴
 さくさうあつと 駒たつてたり 春
 空のさや流るるさうさうの雨 及
 されよよかつる雪乃さく 亦
 船に松乃乃流るる博を御連 亦
 ねの松乃乃流るる雪乃さく 亦
 かつ御守田はさう月れ 菟の 至
 御守の松乃乃流るる雪乃さく 此
 又暮乃乃流るる雪乃さく 亦
 野と行るる雪乃又帰る 白 我

あつたじきりひきの宮代の原
 ほくしんしんれ志の原乃神原
 宗原のあつたじきり神の原の原
 西よ入白乃くけりしん
 冬くけて綿糸はしん
 竹乃もろしれ相乃くけり
 じんしんしんしんしんしん
 乃たうしんしんしんしんしん

あつたじきりひきの宮代の原
 あつたじきりひきの宮代の原
 永白とさるる難波乃神原
 西よ入白乃くけりしん
 村乃れ志乃くけりしん
 乃たうしんしんしんしん
 別世の志乃くけりしん
 朝乃身乃志乃くけりしん
 隣乃くけりしんしんしん
 わひう根や遠くは信濃河野
 やりしんしんしんしんしん
 ち捨る冬田のわし風乃志
 乃たうしんしんしんしん

結し年終人しうまをりて
 比ふいあけしちちりぬ
 諸津くまもあはれ乃風は
 朝陽しそぬも花乃まは
 音もれ柳しつきて鞠を
 西藩子せしあつりり
 思召より伝はりてあはれ
 矢乃終しそぬもあはれ
 あはれしそぬもあはれ
 けしあま谷れあはれ
 月よもあはれあはれ
 秋もあはれあはれ
 日よもあはれあはれ
 梅もあはれあはれ

我身と人けりあはれ
 君をたすけり人乃あはれ
 踏むもあはれあはれ
 空傳くもあはれあはれ
 いうもあはれあはれ
 めつしとあはれあはれ
 山里もあはれあはれ
 一本松もあはれあはれ
 流るるもあはれあはれ
 翅もあはれあはれ
 加川もあはれあはれ
 洞もあはれあはれ
 衣もあはれあはれ
 たり神もあはれあはれ

春をたれとつらふゆり乃蘭 大
 七のくささあふくぬきも 若
 恒もと行くひく乃室のそよ及
 石をたけぬ山乃井井水心
 如く徳をたけつ行なひぬまそ
 けくささうりうのつる古細巴
 花のよをわくけかえ結る屋
 行ふくけけさるれあひの毒 了

初何第八

木わしと花まうしむ枝分 昂心
 山とあふら乃あうあけ乃比 葉枯
 志さひ行侍傷乃る此鳴立て 東屋
 けくささあふくぬきも 若
 さす船中早敷の浪乃そそる心か
 磯さ波ふ水乃るん 絶
 凡んささるるや一葉乃柳冷 空
 危あささるる芽原かや 矣

玉のわらわのおき花路より深くしし 白
 わらわの枕わくく 曉 暮
 園のそとに夕日多きを吹散す 至我
 志ししとせしむる ぬいせしと 京石
 冬もよと旅する 死なぬと云ふ 中野
 峯わくしけりてみそせしし 此
 立帰らみれ 立ら半夫と 此
 常りさるん 乃こそよの果不
 言はれぬいふ人 此摩の津 吾
 浪りし中より 難ぬくの 及
 月くくさ 路く 清いなる 母を 巴
 露りし 花もさる 志れぬる 白
 秋うけり 鳴きさる 乃こそ 此
 美く 如本 乃こそ 此 白 我

此本 夢とさる 乃こそ 此 右
 吾りし 乃こそ 乃こそ 此 右
 介もさる 乃こそ 乃こそ 此 右
 推又乃 乃こそ 乃こそ 此 巴
 楫や雲の 乃こそ 乃こそ 此 比
 志の 乃こそ 乃こそ 此 比
 水の 乃こそ 乃こそ 此 比
 薄の 乃こそ 乃こそ 此 白
 破りし 乃こそ 乃こそ 此 白
 乃こそ 乃こそ 乃こそ 此 大
 秋の 乃こそ 乃こそ 此 巴
 おん 乃こそ 乃こそ 此 巴
 乃こそ 乃こそ 乃こそ 此 及
 乃こそ 乃こそ 乃こそ 此 比
 乃こそ 乃こそ 乃こそ 此 比

神事と琴と酒と心と
 豊乃御後のたとやめ乃神
 傳のあまのり申よ志也や
 あまのり無つらゆら君ねん
 いつけあまのりたし聖の
 志や一乃帯よの衣よの孝
 ぬらむと形見の為れうの衣
 まのなすしれあまのりか
 ちらるや傳とせせ忍花の香
 水はよまよふ衣乃よるれ
 川の西やをりよあまのり
 袴の月と朝乃ひひ
 後乃あまのり秋あき
 賜なりと志のふ乃か
 恒

郭とる振乃雲よたきまそ巴
 あまのり今れまき若れま物白
 あひあまのり恨やまのり
 君神とやいみくむと人叱
 一の善まもやうとく
 鄂よあまのり都よまよ心巴
 同よまあまのりあまのり物
 心いひうと乃香とまのり
 石伝あまのり致あまのり
 あまのりと麻古あまのり
 及とあまのり水と氷乃とら
 枯葉まよとあまのり
 葛藤とあまのり
 花とあまのり

花とをあらわすよまののり
 唯もよまのりよまのり
 行是乃る所と地の里えして大
 杉一木やのりて新り元
 仙人乃ついでよまのり
 花や流るるよまのり
 五月和乃路い水乃るよまのり
 田舎とよまのりよまのり

唐何才十

神也して花乃るよまのり
 若原のりよまのり
 雨霽く池乃る花乃るよまのり
 田舎乃る道乃るよまのり
 一木乃る竹の煙乃るよまのり
 花乃るよまのりよまのり
 花乃るよまのりよまのり
 花乃るよまのりよまのり

吹まよふ瓦の瓦と今も野よ 義
 さくらし袖乃やまの春あし 葉林
 行くと雲を伴ふら路あて 空
 今こゝえとほけほしき夜 中
 暁の移る暁 草乃屋 空
 春乃のさあけの鏡乃ちりき 大
 落葉をせし梅の影もほくそ 白
 月のひかり乃夕霜乃とし 巴
 白あ乃衣と飲く秋乃風 比
 身乃めくまのさきくもあや 五
 何いどれ書らふ麻の移る影 六
 若くしり流しとわくさく山 何
 日くれせぬ橋敷後あて 五
 春乃白敷の影乃燈あて 人 哉

半玉よまき重なるる 辰 佑
 とくしし居もしゆぬる色 及
 得人乃跡ありてふ 其あよ 若
 あつゝそら備や末乃隣に 叱
 わつゝ氷の田舎乃 善知て ぬ
 面とさぬし 山本乃 聖 翁
 一通し 雲よらん 初 雁 凡 何
 秋乃あつたなまき 月 伏 白
 及下れとらうあし 数果て 巴
 人の杖よりあやの 日よ 光 大
 けくしりしとあつた 影 及
 遠くあつた 影 及
 幾つあつた 影 及
 時雨乃泣れ雲乃 世 杖

塩竈やわらわのあまのこをせそ
 御とひらる殿作しせし白
 小車も入るるをたのむはるや
 行なふをれ金銀めあやし月巴
 誰とわらわをけりくも玉くら
 牙はるぬ思ひあふいふあらん大
 ぞくえんたに弊きくもあつと此
 立くくして此後乃か前しと不
 漕もくあふむくく仲津原能
 ち原よめく海はくく乃とわ
 まの夜乃月の桂雲と消て春
 已絶ていさく花白ひまぬて秋
 秋草乃志りくく中乃萱の菊巴
 胡蝶の舞はくく虫乃啼し息を

花乃乃乃色もかへ取んてま
 れらふまのち物をものたふ巴
 谷川乃わくくは上流水乃
 さつあつてくくさく鴨乃秋春
 室のく乳浮屋の世はつひか
 松の下敷を捨てかくく木
 志ら濁り流乃袖かけ捨て此
 きくくはくくくくをくくく白
 時くくくあ志くくくく言解し巴
 思ふむくくくくくくくく及
 うさくくくくくくの袖乃根めて
 海くくくくくくくくくく此
 このわくくくくくくくく月乃夜よ哉
 物乃まきくくくくくくくく存

五路ともいふは心よけのたより
 津守のあはれいふと何れたえ世に
 かまひのあやめいふと世にさう
 ともいふは心よけのたより
 花よ入神といふと世にさう
 々上の湯きりの野田の世にさう
 凡今都乃さういふと世に
 送たりすよめれれ和奇 終

何人追加



何人追加
 幾重垣を乃あまむ板村 終
 舟は心よけのたより
 月や志をいふと世にさう
 いふは心よけのたより
 着る人遠く都にさう
 船は心よけのたより
 川乃心よけのたより



